

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370300935		
法人名	有限会社 敬愛		
事業所名	グループホーム敬愛		
所在地	岡山県津山市東一宮22-10		
自己評価作成日	平成30年2月6日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaikokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2017_022_kani=true&JigyosyoCd=3370300935-00&PrefCd=33&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO・会館
訪問調査日	平成30年2月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

毎年恒例の四季折々の行事もさらに工夫や学びに変えたり、利用者にもっと喜んでいただきたいの思いで、新しい行事をどんどん取り入れております。安心、安全な生活を大前提として、その生活を彩り豊かなものになろうと次々に実践することで、地域の方には「敬愛さんは、餅が危ない、杵は危ないを全て取っ払い実現していることが素晴らしい」と運営推進でお言葉を頂きました。ホームの目標を「思い、寄り添い私の利用者さんと言えるようになります。」と掲げており、担当者が中心となりケアプランを机上の空論にせず、一日一日のケアを積み重ねて目標の実現に向けてチームでケアしています。運営推進会議では、当ホームでも多くなっている看取りについて、一年で五人の人生の最期に係った重みを議題にさせて頂いたり、最新の考え方である「リビング・ウィル」「アドバンス・ケアプランニング」についての情報交換を活発にしております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

訪問すると真っ先に小型犬の「さっちゃん」が威勢よく私達を出迎えてくれた。今日は美作高校の実習生も2名来ていたとの事でリビング全体も若々しい雰囲気がある。開設当初からの利用者を含め、この1年間で5名を看取った。「同時に3名看取った時もあり職員の負担も大きく大変な年だった」と管理者が語っていたが、職員が力を合わせ乗り切った経験は何事にも代えがたい宝物となり、自信と各々のステップアップにもつながった事だろう。人にはそれぞれ生きてきた歴史があり、その人生が終着駅に向かおうとしている時、どんな最期を迎えたいのか？自分らしく生きたいという希望を叶える為に、現在「リビング・ウィル」に取り組んでいる。介護の現場で本人から生活に対する意向をしっかりと聞き取り、元気で意思表示が出来る時に出来る限り本人の思いや希望を把握してこうと努めている。異業種から介護の世界に入って5年という男性管理者は、「利用者の目を見て、顔を見て会話することを大事にしている」と語ってくれ、理念の三つの心が職員間に浸透しているのを感じた。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の基本理念「三つの心」を管理者、職員が日々大切に育み続けられるよう毎日唱和し、実践している。新入オリエンテーション時にも、特に詳細に理念について統括より説明している。	「心をみがき、心を育て、心の目で見える」この理念を毎朝の申し送りの時に職員間で唱和しており、指針と理念は全職員が熟知している。今年度の目標「思い・寄り添い・私の利用者さんと言えようにします」を掲げて、常に新しい取り組みにチャレンジし続けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的に散歩や外出の際に近所の方と挨拶を交わしている。地域のお店に買い物にも行ったりホームの新聞に掲載する為に利用者や地域の店舗に取材に行ったり、先日は訪問美容師さん、訪問看護師さんに取材を実施している。	今年で12回目を迎える「敬愛祭り」には、地域の子供達も沢山来てくれて好評であり、地域との交流も恒例になっている。公民館で開催された「すこやか料理教室」に利用者・職員が参加し、美味しい料理をいただき地域のひととの交流も出来た。高校・大学・専門学校の実習生の受け入れも多い。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で地域の方々に認知症について話す機会はもちろん、地域の料理教室に参加したり、小学校の発表会に参加した後日入居者本人がお礼状を出すなど、実際に触れあったり、縁を持つことを大切にしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	特に今年看取りが多く、長く生活された方を次々に見送った。ご家族が、運営推進で11年暮らされた思いを率直に伝えて頂き、やはり事業主から活動や取り組みをお伝えする事も重要ですが、家族の生の声や地域の方からの発信こそが真の運営推進だと痛感しました。	市の担当者、地域包括、町内会長、民生委員、愛育委員、家族代表等の参加を得て、2ヶ月に1回有意義な会議を開催出来ている。今年は特に、看取り後の家族の思いを吐露されグループホームの役割が見直された会議となった。議事録も詳細で情報交換・意見交換している様子がよく分かる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者には、常に真摯に報告相談を行い、担当者からも事業運営に関して事業所及び入居者の立場に立った指導、助言をいただいている。	運営推進会議には市の担当者や地域包括の参加があり、ホームの活動状況や実情をよく理解してもらい、情報交換をしている。市主催の「高齢者虐待防止」の研修に参加したり、何かあればその都度、市の担当者に相談し、日頃から連携を取り合っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入職時に身体拘束の禁止等について学び理解して現場に入る。すべての部署において起きた事故やヒヤリハットも共有し、他人事ではなく常に入居者及び職員の安全意識改革に活かしている。身体拘束とは、明らかな言動によるものより、悪意なき言動こそが身体拘束の芽であると考えている。	「帰りたい」と訴える人には、一緒に外に出て本人が納得するまで付き添っているが、話をしたり、何か仕事をお願いして気分転換をしてもらう事もある。職員は何が拘束になるのか「身体拘束廃止」等の研修をしてよく理解しており、言葉の抑止にも気をつけている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入職時に高齢者虐待法について学び、理解して現場につく。明らかな言動による虐待はもちろん、悪意なき言動こそが虐待の芽であると考え、虐待はなくすのではなく、起こりうるものとして常に接遇の向上を掲げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	一部管理者や役職は理解出来てきたが、いまだに他職員には成年後見制度の認識、理解不足がある為、学ぶ機会を持ち活用出来るようにする。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、家族、利用者ともに重要事項を確認しながら説明し、その都度、疑問点がないか尋ねながら進めている。契約時のみならず、その後には熟読を伝え後日いつでも、不明不安な点については相談窓口の利用を説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の思いを聞き、時に汲み取りケアに活かし、家族とは、手紙、電話、面会などで密な関係を作り、思い、意向を言ってもらい、希望に添えるように努力を行っている。新しい取り組みとして、行事開催時には、アンケートを実施している。	年2回「花見会」「クリスマス会」の時に家族会も併せて開催して親睦と交流を図り、出た意見や要望は記録に残している。敬愛祭りについて家族アンケートを取ったり、毎月利用者の担当職員が自筆の手紙を家族に出して近況報告をする際、未完成の折鶴を同封して家族に最後の折りをしてもらうという共同作業を行なっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のミーティングで、職員一人ずつ発言する時間を設けているほか、個人面談を行っている。各行事研修時には、アンケートを実施して匿名での意見を言いやすい環境を作っている。	毎月職員同士で良い所を評価し、月間MVPを決めている。更にGHから1名、デイサービスから1名ずつ年間MVPを選び社長からの表彰がある。職員のモチベーションを高めステップアップにもつながっている。毎年受け入れている実習生の中から卒業後にグループホームに勤務した例もある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職場に運営状況を職員にも公表し共に考え、入居者さんの為のケアが入居に繋がり、入居者さんから評価、給与が出ている意識改革を実施。その上で職員は自己評価を行い、その後、代表者が総合評価を行い、給与、賞与に反映している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者、職員共に、外部研修に参加する機会を設け、自身の意識向上に努めている。研修に参加した物は実践で生かすべく中心となる役割を伝えている。また有資格者が率先して技術指導し先日施設内で「ベッド上で行う洗髪」を行った。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者と交流できる場に行き、ネットワークを広げ先日も、医療だが「地域連携室」室長が「GHIは同法人の一か所しか知らないのを見学したい。」と急遽見学につながった。今後はこちらも見学したいと伝え、縁に繋がりたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前の本人面談で、困っていることや不安に思っていることを聞き、これまでの生活環境に少しでも近付き、安心できるように努めている。本人の意思や思い同様にサービス事業者からも状況共有することで初対面の緊張を和らげるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にも事前に面談を家族の思いを聞き、その思いに添えるようなサービスの提案をし意見をもらいサービスを導入する。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今、必要としているサービスを見極め、ホーム以外のサービスが必要な場合、他の機関に相談、紹介を行う。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護されているという思いではなく、暮らし・生活を共にしているという思いになれるよう、毎日、喜怒哀楽に寄り添い本当の姿を知る事で良い関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の代わりというのはおこがましく、常に自分たちの福祉としての役割や責任を自覚し本人と家族の絆が切れないように、良きパイプ役となり繋げている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人、親族が面会に来られた際には、また面会に来やすいような対応をしている。家族と外出も積極的に行って頂けるよう、状態を伝え安心して外出して頂いている。	夫婦で別々のユニットに入所している人は、いつでもお互いに会いに行けるので安心出来るし、家族の希望で、喪服を着て法事に参加した人もいる。利用者にとっては昔から馴染みのある行事「針供養」が出来るのも嬉しい。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士、会話や家事をしながら交流をしている。関わりが難しい利用者にも必ず本人が持つ得意な事や心動く瞬間を見逃さず共に生活する仲間と共有することで、生きる喜びに繋げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も家族の相談に乗ったり、入院中の様子を聞いたりしている。必要に応じて医師、相談員との話し合いに参加している。退去後も、近くに寄った際、もしくは法人内の他サービスで交流が持てるようになっていく。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人一人のこれまでの暮らしを把握し、希望、意向に添えるように努めている。困難な場合は、日々の生活の中にこそ様々なメッセージが込められており、各職員が目標である「私の利用者さんは…」と代弁するよう努める。	日頃の関わりの中でよく話し、本人の希望で席替えをしたり、重度の人とは食事介助の時に声かけをしながらコミュニケーションをとっている。介護の現場で本人から意向をしっかりと聞くように心がけ、意思表示が出来る状態の時に、元気な時に、出来る限り本人の思いや希望を聞いていこうと努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の面接時、家族からの話し、入所前に利用していたケアマネジャーから得た情報を職員全員で共有し理解、把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の生活リズム、バイタルを把握、共有し、日々少しの変化に気付けるように様子観察、記録を大切にしている。今までの暮らしぶりが自然と出せるように本人の行動、言動の把握も大切にしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	生活がより豊かになるように、本人、家族の要望はもちろん、必要に応じて医療機関にも意見を聞いた上で職員でカンファレンスを行い、現状に適した介護計画を作成するようにしている。	利用者の担当制があり、担当者が利用者の現状を踏まえながらプランを考え、計画作成担当者が助言・検証してプランを作成している。日々の生活の中から見えてくる課題だけではなく、「生きがい」や「楽しみ」をプランにつなげる取り組みをしようと目標達成計画に挙げている。	利用者の事を一番把握している担当者がプランを作成する取り組みは素晴らしいが、ニーズ(課題)や目標がシンプル過ぎて、尚且つ抽象的なので、本人の意向をよく聞いて精神的な支援(心のケア)を重点に置いたプランを作成して欲しい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録はバイタル、食事、水分、介護経過をまとめて見る事が出来るようになっており、そこからの気づき、実践結果も送りノート等を活用している。さらに日々のケアの変更へつながる小さなカンファレンスを臨時カンファレンス記録として活かすようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況により、ニーズに沿った支援方法を常に前向きに検討している。その為入居者、家族の最期まで敬愛で…を支えるために、「バルーンカテーテル」「人工肛門」の受け入れを実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の介護力の底上げ、地域資源の活用は使命だと感じる。小学校へ、愛育委員料理教室へ、一歩外出するとすぐに父兄が駆け寄って手を取ってくれる。民生委員が車椅子を介助してくれる。これこそが、自然な形の安全で豊かな暮らしだと確信している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	二週間に一度、主治医が往診に来てくれているが、他科の受診が必要な場合には、主治医、本人、家族と相談をし、適切な医療が受けられるようにしている。	利用者・家族の希望するかかりつけ医になっており、複数の医療機関からの往診がある。内科は職員が同行する機会が多いが、他科受診は原則家族にお願いしている。週1回の訪問看護もあるが、職員に看護師も配置しているので日常的に安心して生活出来ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に一度、訪問看護師が来ている。様子、状態を伝え情報を共有した上でアドバイスをもらい、必要であれば医師へつなげる。適時介護現場での不安や疑問に常に真摯に向き合い時に助言をしてくれる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には、病院に行き情報提供を行う。入院中は面会に行き本人の状態を確認すると共に、医師、看護師、相談員とも早期退院に向けて話し合いをする。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化、終末期についての方針は入居契約時に家族に説明をしている。医師からも終末期の対応についての説明があるのでホームで出来る事、出来ない事の理解がより深まる。出来る、出来ない事も年々変化しており、地域にも運営推進を機会に看取りにつても常に発信している。	この1年間で5名の看取りを行なった。開設当初からの利用者を見送り、同時に3名亡くなる等、職員の負担も大きく大変だった年でもあった。家族が立ち会い穏やかな最期を迎えた人もいる。現在もターミナルの人がいて、予断を許さない状況と聞いている。職員の心の葛藤もあるが、出来る限りホームで支援していこうと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時(昼・夜)のマニュアルを作成し全職員の周知徹底をしている。毎月のミーティングも研修の場として、看護職員による「窒息時の対応」を二人ペアになり実践する等救急時に活かせる取り組みを行い消防署員から学ぶ機会も設けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年二回訓練を行っている。職員は、危機感、責任感を持ち、積極的に訓練に参加している。地域の特性に生きた、水害時と台風害、地震対応避難マニュアルを完成させた。	利用者も参加して日中・夜間を想定した避難訓練を実施している。消防署立ち会いの下、水消火器を使用した消火訓練を行ない、心肺蘇生法(AED)の研修もした。3種類の災害時マニュアルも作成し、地域との協力関係も出来ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入職時に呼称制度について学び理解して現場につき、尊厳とは生活の場において何を守り何が大切なのか？敬愛宣言においても16項目について詳細に説明を行っている。	呼び名一覧表を作成して、本人の希望を聞き「○○さん、先生、○○ちゃん」等、職員間で呼称を共有し統一し、言葉遣いにも日頃から気をつけている。ケアプランの署名欄を見ると本人の自署が多く、一人ひとりを尊重し自己決定してもらっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望を聞き、自己決定が自然とでき、その場を共有すよう記録を大切にしている。そして、担当者は常に「私の利用者」と、利用者の代弁者を意識し、利用者主導の支援を行うよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活リズムは人それぞれの為、共同生活の中でも本人のペースが守れるよう、無理強いはせず専門職として本人の時間と流れの中にケアを組み込む。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服の選択が難しい方は、本人の好み、季節感を大事にしている。二ヶ月に一度の散髪も本人の好みを尊重している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食の好みを職員は把握し、メニューが偏らないようにしている。食事を五感で感じるものとして、盛り付けや食器の選択にも工夫し、外食に行く際も事前に何が食べたいか尋ね、楽しみ、期待が膨らむように心掛けている。	毎食職員の手作りで、各ユニットのその日の担当者が冷蔵庫にあるもので作っているとの事。食事介助が必要な人もいるが、殆どの方は自分の箸で食べており、「美味しいなあ」と言いながら皆さん完食。毎年恒例の「魚のつかみ取り」では、利用者がつかみ取りした魚をその場で焼いて食べるという楽しいイベントもしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量は記録し、必要量が確保出来るようにしている。食事形態も配慮し、医療の指示は守りつつ、本人の習慣に基づいて相談助言を求めている。意欲や心が動かなければ、食欲にはつながらない。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは習慣となっており、自分では出来ない方は介助をし、清潔保持を行い、必要時は歯科へつなげて最後まで自分の歯で美味しく食べる事が出来るよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを把握し、トイレでの排泄を続けられるように努めると共に、排便マッサージを訪問看護に伝授してもらい技術の取得にも努めている。生活向上委員会では、紙パンツから布パンツへの変更し、生活の質を中心に考えている。	排泄が自立で布パンツの人は5名。リハビリパンツにパットの人が多いが、入所後に布パンツに改善した例もあり、出来る限り布パンツで過ごしてもらおうと頑張っている。その人に合ったパットの検討もしている。個々の排泄リズムを見ながら適宜声かけ誘導して自立支援につなげている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量が少ない利用者には無理なく水分が摂れるよう、好みの飲み物を摂取してもらい、水分不足による便秘の予防に努めています。日常生活の中に運動を組み込むことで「ちょいとれ」を実施している。運動が難しい方はマッサージを行うなどしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	午前、午後入浴可能。午後からの入浴を習慣となっている利用者もあり、希望に添い入浴を行っている。自分でほぼ行える方は、浴室内には入らず常に音を聞き、声掛けを行いみまもりをして自尊心に配慮している。	殆どの人は職員とマンツーマンでゆっくり入浴してもらっている。体調や気分によりシャワー浴で清潔保持をする等、柔軟に対応している。入浴拒否の人もいるが、タイミングを見計らって言葉かけに工夫する等して、今のところは週1～2回は入浴出来ている。冬季には柚子湯をして喜ばれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息は利用者がしたい時にしてもらっている。昼寝が夜間に影響する傾向が見られる場合は、職員で対応を検討している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の情報は常に最新のものを職員全員が共有している。薬の変更時は、特に注意深く様子観察をして、服薬方法についてもかかりつけ薬局にすぐに相談し迅速に形態の変更等に対応してもらい、入居者も苦痛なく安心して服薬出来る。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人が心動く事柄はそれぞれ個性の強く出ることであり、他人の世話をする事でイキイキする方。きゅうりを持ってると「私がするでー！」と、キュウリだけ反応する方。将棋で目が本気になる方。その個性を引き出し守る事を大切にしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日々中庭でたばこを吸う、時に玄関から出て西の景色が見たい時。近所の駄菓子屋へ300円だけ持って買いに行く。今日は、一番好きな洋服を着て、化粧をして国際ホテルへ。しかし車椅子のトイレがない事実。ホテルから何度も何度も謝罪され、ぜひ建て替え後にも行きたいとなる。	晩秋の景色の中をドライブして紅葉を楽しみ、家族と一緒に花見へ等、四季折々の外出支援に力を入れている。要望があれば外食へもよく出かけており、プチフルコースや会席料理を楽しんでいる。天気の良い日は散歩に出かけ気分転換してもらっている。家族の協力を得て出かける個別外出も出来る限りの支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	初詣では、自分で賽銭をしっかりと握りしめて神社に行き、駄菓子屋ではカゴに入れながら計算して脳のトレーニング。利用者さんにお金の大切さを教えてもらうのは、その握るこぶしの強さやいつまでも賽銭を入れてから拝み続ける姿からだと学んだ。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を所持している方が二名、いつでも自分から連絡を取れる。写経で心穏やかに過ごし、中学生の吹奏楽を聴きお礼の手紙を、依頼すると「忘れたな」と言いつつ心のもった文章を長文で書くなど、この瞬間を楽しみ輝けるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用スペースは利用者の動線に配慮し、皆でイベントを楽しむときにはきちんと説明して家具を動かし、季節の花や飾りで季節感を出している。春には自分の苔玉を作って水やりをしてもらうなど、緑のある空間を大切にしている。	リビングの掃出し窓は開放的で中庭に自由に出て隣のユニットに行き来でき、テーブルとソファが適度な間隔で配置され落ち着いた空間になっている。両ユニットのリビングにそれぞれ小型犬がいて利用者によくなつき癒しの対象になっている。利用者も自分のお気に入りの場所で思い思いに過ごしている。	リビングは静かで動きが少なく、全体的にも活気があまり感じられない。落ち着いた和やかな雰囲気もいいが、もう少しレクやアクティビティを取り入れ、生活に楽しみを持ち、個別レクに力をいれても良いと感じる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースのテーブルの座席の配置は、気の合う人、合わない人を見極めトラブルのない居心地の良い場所になるようにしている。ソファには手作りカバーを作るなど、過ごしやすい環境づくりを行う。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の家具、道具は使い慣れたものを持ち込んでもらっている。ベッドの配置等にも配慮し、風景を見るためや車椅子を運転しやすくするため等個人に合った模様替えを大切にしている。	各居室の入り口に「花の絵のプレート」が掛けてあり、この花が好きでとても気に入っていると教えてくれた人の部屋に案内してもらった。どの部屋もその人らしさが滲み出ている。家族の写真を飾ったり、テレビ、ラジカセ等を持ち込み本人のペースで自由に暮らしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレには手作り機能的なしかもデザインもかわいいパット入れを作った。浴室も動線に配慮して、アルミラックを探し、スペースの有効活用を主任中心で行った。洗面所、キッチンがわかりやすく自立に揃っている。安全にも十分配慮している。		